

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：33703

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520206

研究課題名（和文） 東海地方における地域密着型の能楽興行に関する研究

研究課題名（英文） Study on a local adhesion type Noh play performance in the Tokai district

研究代表者

米田 真理（YONEDA MARI）

朝日大学・経営学部・准教授

研究者番号：20398358

研究成果の概要（和文）：地域住民の主催により近世から近代にかけて行われていた能楽興行について、文献資料の調査と地域の方へのインタビューを行った。調査の対象とした地域は、愛知県名古屋市、同 豊橋市、岐阜県岐阜市、同 大垣市、三重県桑名市などである。その結果、能役者と地域住民の間の師弟関係や、興行の際の役者の招致について、明らかにすることができた。例えば、豊橋では、旧吉田藩の武士と町人が共演し、伝書を共有していたことがわかった。また、木曾三川の西側では、交通や経済の面でつながる上方（京都・大阪）からの影響が大きいとの新知見を得た。

研究成果の概要（英文）：About the Noh play performance sponsored by the local resident from the Edo period to Taisho Era, we performed literature documentation and interviewed the person of the area. The investigated areas are Nagoya, Toyohashi, Gifu, Ogaki, and Kuwana. As a result, it was able to clarify about bidding of the teacher-student relationship between a Noh player and a local resident and the player in the case of performance. For example, in Toyohashi, it turned out that the samurai and townspeople of the old Yoshida han were playing together, or that the script was shared. And on the west side of Kiso 3 river, it turned out especially that the influence from Osaka which has relation in respect of traffic or economy is great.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
22 年度	700,000	210,000	910,000
23 年度	500,000	150,000	650,000
24 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：能楽、日本芸能史、芸能興行、東海地方、地方史

### 1. 研究開始当初の背景

能楽資料の収集と整理という面からの研究では、法政大学能楽研究所の山中玲子教授を中心とする、平成 18～20 年度文部科学省

科学研究費補助金（基盤研究 B）の交付を受けた研究課題「地方諸藩の能楽資料に基づく、都市と能楽の関係についての総合的研究」がある。この研究によって近世の幕藩体制下での能楽のシステムはかなり明らかになりつ

つあるが、現代までを射程に入れ、特定地域における特徴を浮かび上がらせるタイプの研究は、いまだ進んでいない。

また、東海地域における芸能の研究としては、相山女学園大学文化情報学部の飯塚恵理人教授を中心とする、平成18～20年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）の交付を受けた研究課題「近代東海地域能楽資料の収集と整理—他の「伝統芸能」との交流」などがある。この研究によって、日本舞踊・長唄・箏曲をも含めた伝統芸能に関する映像や音声のデジタル化が進められている。当研究における文献資料面での成果は、飯塚氏の著書『近代能楽史の研究—東海地域を中心に—』（平成21年2月 大河書房）にまとめられた。しかしながら、映像・音声のほかにも、文献、能面・装束などの多くの資料がいまだ整理されておらず、さらに研究を進める必要がある。だが、対象が多岐に渉る上、分量が非常に多く、かつ散逸の恐れがあるなど緊急性を要するため、このたび、映像・音声を中心とする分野については飯塚氏が研究を継続し、文献を中心とする分野については申請者（米田）が継承する形で、新規に研究を立ち上げることにしたものである。

平成18年、豊橋市魚町能楽保存会所蔵の狂言伝書の存在を発見し、戦前まで愛知県新城市の住民と連携して祭礼行事の能楽を行っていたことについて解明する手がかりを得た。しかし、資料に記されている屋号の家が近年になって途絶えたり、戦前の状況を知る人が相次いで逝去したりしていることから、早急な本格的調査が必要なことを痛感した。以上のことから、このたび米田が研究代表者となり、研究分担者として飯塚氏が加わる形で、文献資料調査を中心とする研究を行うこととした。

## 2. 研究の目的

本研究では、東海地方に残っていた地域密着型の能楽興行（特に、神事や祭礼において住民主体で上演されていた能楽）に関する資料を収集・整理し、地域住民や役者に対して聞き取り調査を行う。こうした芸能は、中心となる寺社が震災に遭ったり、自治体行事から宗教色が排除されたりして、終戦以後は行われなくなったものが多い。その結果、住民や寺社が所蔵する芸能資料の中には、保存環境が劣悪でかつ散逸の危険のあるものが、少なからず見られる。また、戦前の芸能について知識のある方が高齢化しており、いま早急に記録しておかねば、近い将来、地域密着型の芸能文化が行われていた記憶すら失われる恐れがある。

そこで、本研究を通して、各地域における芸能文化の特徴を明らかにするとともに、地

域間のネットワークや教授システムなどの実態を解明したい。さらに、研究成果の公開を通して、地方公共団体等に対して資料保存の必要性をアピールしようとするものである。

## 3. 研究の方法

本研究では、研究代表者ならびに分担者が専門とする能楽（能・狂言）を中心に、地域に残存する番組等の資料について複写・撮影して収集し、データベース化を行う。また、住民や役者に対する聞き取り調査を行い、興行や伝授等の実態について記録する。研究成果については、学術論文や学会発表だけでなく、地域の広報誌、博物館紀要などの機関誌などでも、積極的に成果を紹介し、地方公共団体等に対して資料保存の必要性をアピールすることも、目的とした。

## 4. 研究成果

（1）豊橋 魚町安海（やすみ）熊野神社所蔵狂言台本に関する調査

愛知県豊橋市は旧吉田藩時代から能楽を愛好する気風が行き渡り、中でも魚町の安海熊野神社では、明治初期から戦前まで盛んに演能が行われていた。だが、豊橋は太平洋戦争時に空襲のため焦土と化し、能楽に関する文書資料はほとんどが焼失してしまった。

その中で、奇跡的に焼失を免れた多数の狂言伝書が同神社に現存していることが、平成18年8月、東海能楽研究会による調査によって明らかになった。

それは木製書箱に保管されていた計172点の資料で、このうち和泉流の狂言台本が150点余りを占め、その他は狂言に関する装束付、誓詞状のほか、版本の謡本や弘化勸進能番組、絵画指南書などである。

本研究では、これら狂言台本の性格を明らかにすべく、奥書等に記される人名を整理するとともに、和泉流の他の台本も含めた本文の比較を行った。

### ① 伝書を編んだ人々

安海熊野神社所蔵の狂言関係伝書は、版本『続狂言記』4冊の他はすべて写本である。さらに、これらは表紙を備えた30～90丁の本と、狂言1～3番を収めた数丁でいどの仮綴本とに分かれる。このうち前者については、中には同一の筆者により一貫して記されたものもあるが、それよりも筆跡や用紙の異なる一番本（1冊に1曲の台本だけを収めた本）数点を、後で合綴したもののほうが多い。

台本の書写時期は江戸時代後期から大正にかけての広い範囲にわたる。もっとも古い

年記は文政11年(1828)で、魚町で「現金屋」という屋号の商売を営んでいた、古市乙蔵(音蔵)奥書の本に見られる。また、嘉永3年(1850)9月の年記を有する台本の筆者・大木惣助は、文政から弘化年間に、豊橋の近隣地域である新城の吉田神社祭礼能に出演していた。

一方、比較的新しい年記としては大正2年8月のものが見られ、これは明治40年から昭和23年までの長きにわたり吉田神社祭礼能に出演していた、新城の住人・藤城良吉が編んだものである。このように、安海熊野神社に収められている多数の狂言台本は、長い時間をかけて、何人もの人物によって書写された台本の集積なのである。

## ② 台本の本文比較による系統付け

台本の性格をより明らかにするため、同じ曲を取り上げて比較を行い、書写者や年代による異同について調べた。本研究の期間内では、江戸時代の豊橋を治めていた吉田藩に属する武士に由来する本文と、能楽の興行について豊橋と交流のあった新城に由来する本文の2系統を見出すことができた。さらに、和泉流の狂言台本として既に存在が知られているもののうち、江戸時代後期に書写された波形本および雲形本との関係について考察した。

### a. 吉田藩士由来の本文

安海熊野神社蔵の狂言台本の中には、「田沼」「たぬま」「多努麻」の署名を有するもの(以下、田沼本と称す)が21点含まれている。この人物は、吉田藩の安政6年(1859)8月改訂の『松平伊豆守家中分限帳』(『豊橋市史』第6巻所収)に、「武器方 四十俵 田沼小弥太」として掲げられている人物であることが確実視される。

田沼小弥太は、天保・安政年間における豊橋および新城の能・囃子組が収録される早稲田大学演劇博物館保田文庫蔵『能囃子番組之留』の中に、狂言の出演記録を見出すことができる。さらに、同番組によれば、魚町住人の大木惣助や大木又平、加山喜蔵と共演する機会もあった。そうした機会に藩士と町人との間で演出に関する打ち合わせが行われ、このことを背景として、吉田藩士である田沼の本が魚町にもたらされたと考えられる。

そのことを裏付けるのが、狂言台本の本文の類似性である。《瓜盗人》について田沼筆本と加山筆本を比べると、漢字やカナの表記が異なってはいるものの、「同じ台本」と言っても差し支えない。すなわち、共演した記録もある田沼小弥太と加山喜蔵は、同じ台本を所有し、使用していたと考えられるのである。

### b. 新城由来の本文

牧野新作(方舟)はもと新城の住人で、新

城では「先生格」として扱われていた実力者だった。牧野筆本の《瓜盗人》は、先述a.の田沼筆本・加山筆本とは異なる語句が多く含まれており、安海熊野神社蔵台本の中で、別の系統を形成していたことが知られる。

### c. 波形本との校訂本

上記aとbは異なる本文ながら、いずれも和泉流台本のうち「波形本」と称されるものに沿った内容であり、和泉流の諸派に分別できるほどの根本的な違いとはいえない。波形本とは、天明6年(1876)ごろ、和泉流の重要な弟子家である早川家の二世、幸八(初代)によって書写された台本である。早川幸八は、明治期以降、新城に指導者として招聘されており、その高弟の水野(伊勢)門水、井上菊次郎、勝野重直らもまた、指導を行っていたことが知られている。

豊橋の魚町においても波形本が活用されていたことを示す台本がある。「本多巖七良」あるいは「本多巖」の署名を有する本である。この人物に関しては、魚町の住人であったか否かは明かでないが、大原紋三郎『新城祭礼能番組帳』(前掲)には、嘉永4年の新城吉田神社祭礼能に「本多岩七」の出演記録が見られる。

本多筆本の特色は、波形本との校訂を行った曲が含まれていることである。それは《釣針》《末廣》《雷》《狐塚》などで、そもそも訂正前の本文も波形本に近い上に、さらに波形本により校訂されていることが知られる。こうしたことから、本多本の成立背景としては、筆者本多巖七郎が、まず魚町でじっさいに用いられていた本をもとに台本を書写し、次に、これらを波形本の本文を用いて校訂したことが窺われる。

言い換えれば、筆者本多は波形本の本文を参照する機会を有していたことになり、早川幸八系統のしかるべき地位にある師匠から指導を受けていたことが知られる。

なお、台本の本文比較にはさらに時間が必要であり、本研究期間終了後も継続して調べを進める予定である。

## (2) 桑名における明治3年佛眼院能興行に関する調査

三重県桑名市では、中世以来、地元の氏神として春日神社(桑名神社・中臣神社)が信仰を集めている。廃仏毀釈の前まで別当をつとめていた佛眼院で、廃藩置県直前の明治3年8月1日・2日・4日(3日は雨天)の3日間、能興行が行われた。

維新期の桑名藩(現三重県桑名市)では、藩主定敬が幕府軍の中心を担ったため、他藩による預かり支配が行われる不安定な状態が続いた。そして、ようやく明治2年8月に定敬の義弟定教が知藩事に任命され、独立し

た地方組織として存続できることになった。本興行の番組は桑名の住民稲川吉兵衛が著した『豊秋雑筆』（全31冊。鎮國守國神社蔵）に、また、経緯は佛眼院の公用記録『公私用留記』（全10冊。桑名市博物館蔵）に記される。

春日神社はもともと大きな規模を誇っていたが、当時は神供所や神楽所などが焼失し、絵馬殿も嘉永地震以来再建されていなかった。その修復のため芝居や踊りの勧進興行が行われており、本興行も目的を同じくしていた。

本興行で注目されるのは、京阪の役者が多数出演している点である。中には他の記録を見出せない者もいるが、ほとんどは、シテ方金剛流の野村三次郎、高岡鶴三郎、中村小三郎、ワキ方高安流の亀岡千太郎のほか、狂言方や囃子方も当時の上方能番組に見られる役者である。

本興行の契機は、直前に大垣八幡宮社で京都の役者による演能があり、その帰京のついでに立ち寄ってもらえば支出が少なく済むと考えられたことだった。当初の計画では興行は6月8日からの予定で、5月15日の大垣八幡社例大祭のついでといえる。ちなみに同年5月6日から8日まで行われた岐阜の井奈波神社祭礼能には高岡鶴三郎が出演しており、この時期、京阪の役者による揖斐川・長良川沿い地域での演能が相次いだことが窺われる。ただし、桑名での興行は、役者の病気などの差し支えがあり、8月まで延期された。

世話役の中心は町年寄の家出身の佐藤卯七郎（天保2～明治27。のちに義一郎と改名）で、幕末は京都所司代時代の藩主定敬を経済的に支援し、明治以後は病院や学校の建設に尽力した地元の名士である。一方、『能楽全書』には狂言の野村又三郎の弟子として紹介され、じっさい安政2年に京都竹内舞台で行われた仕舞と狂言の会で、又三郎や井上常三郎らと共演している。こうした京都とのつながりに加え、先に演能が行われた大垣とは揖斐川水運による地域的な結びつきが強いことから、興行に関する情報を得られたのである。

さて、世話役たちが強く願ったのは、桑名では長年行われていなかった本格的な演能に、旧藩主定敬と新知事定教を招くことだった。結局、一カ月以上にわたり各方面と交渉したものの、定敬はいまだ津藩に謹慎中のこともあり、この願いは叶わなかった。だが、ここから窺われるのは、旧藩主が「朝敵」と称されてもなお、慕い続ける町衆の思いである。

明治維新のただ中で、旧幕府軍に与した藩では謹慎ムードが漂っていた。桑名春日神社も大垣八幡宮も、慶応末年から明治3年まで

は、旧幕時代を偲ばせる伝統的な祭礼行事は自粛されている。著名な能役者を招いた能興行は、こうした祭礼行事の代替としての意味もあった。わずか3日間ではあるが、地元の復興・復権を願う人々の思いが込められた、地域密着型の能興行の重要な事例といえよう。

### （3）名古屋市関係の調査と「下田文庫」

名古屋市に関しては、戦前の名古屋能楽堂（布池能楽堂）に関する資料について、大鼓方大倉流寛敏一氏から情報提供を得て、複写（写真撮影）と聞き取り調査を行った。

また、寛敏一氏預かりの「下田文庫」に関する調査も併せて行った。同文庫は大阪のシテ方観世流能楽師・下田雄三氏の旧蔵書で、明治～大正期に父益三氏によって収集されたものである。下田氏は父子ともに名古屋や岐阜地方で弟子の指導を行っており、（4）に示すように、当地の能楽教授に影響を与えている。

名古屋市に関してはこのほか、旧尾張藩お抱えの伝統をもつワキ方高安流、ならびに狂言方泉流の伝書に関する調査を行った。

また、放送を介した伝統芸能の享受の一例として、昭和20年代・30年台のCBC（中部日本放送）におけるラジオ劇関係資料について調査を行った。

### 下田文庫と下田益三（明治20年[1887]—昭和6年[1931]）

下田家は、明治時代前期、益三の祖父治兵衛の代まで、廻船問屋「鍋屋」を営んでいた。この治兵衛は大阪の観世流の名家・橋岡雅雪から謡曲を習っており、祖父の稽古に同行して橋岡雅雪のもとへ通っていたことが、後に益三が能楽師への道へ進む契機となった。

益三は、雅雪の後継者であった橋岡久太郎に師事し、大阪の橋岡家の会である淡交会を支えるかたわら、能楽関係書籍の収集を行った。下田益三の能楽関係の蔵書は170点以上にも及ぶが、その中には、原本を借り受けて自ら書写したものが多く見られる。これらは、金銭で買い集められたコレクション以上に、益三の蔵書の特徴付けるものである。

下田益三の蔵書の中で注目されるのは、江戸時代に刊行された「光悦本」と称される貴重書と、益三によって制作された複製本の存在である。

光悦本とは、江戸時代のごく初期、慶長10年（1605）前後に刊行された観世流の謡本である。本阿弥光悦流の書体で本文が記され、料紙に雲母（きら）模様がほどこされた華麗な本で、美術史の分野でも重視されている。益三は光悦本を入手するとともに、大正13年、光悦特製本の忠実な複製を製作し、淡交

会を中心に配布した。

益三はまた、能楽に関する研究家でもあり、収集した能楽の伝書をもとに、能の型や謡について熱心に考証を行った。中でも謡のリズムに関する理論である「地拍子」研究は、山崎楽堂や高安六郎といった当時の著名な研究者を相手に、能楽の同人誌上で論戦が繰り広げられた。

貴書に学び、稀書と遊んだ能楽師、下田益三の活躍期は、華やかに行き過ぎた大正という時代とそのま重なっている。同時に、その活動も、この時代の能楽を大いに反映しているといえよう。

#### (4) 昭和 10 年以前の岐阜における観世流の歩み

岐阜の能楽については、昭和 28 年 1 月初版の『能楽全書 第二巻 能の歴史』所収、野々村戒三「能の地方的分布とその情勢」に、観世流が勢力を有する地方として、大垣とともに挙げられている。本研究では、昭和 10 年以前のいくつかの能会の番組をもとに、同時期までの岐阜観世流の状況について考察した。

はじめに、基本となる資料として、昭和 10 年 (1935) 9 月 15 日、岐阜公園内の萬松館にて開催された「岐阜観世会三十周年記念素謡会」番組と、同番組の別紙として作成された、熊野久夫の随想文「岐阜観世会につきて」を取り上げる。同会の中心は素人弟子による素謡や独吟だが、冒頭のシテ武田宗治郎による《神歌》のほか、番組後半には番外謡と番外仕舞があり、観世左近、杉浦義朗、片山博通、武田宗治郎、武田太加志といった、当時の錚々たる能楽師が出演していた。

随想文「岐阜観世会につきて」によれば、当会の発足以前の岐阜の謡は「京謡」であった。ところが、「富裕なる財産を持」つ「武儀郡關町」(現関市)の愛好家・岡崎廣次郎による観世清廉の招致が 10 回にも及んだので、岐阜の人々も「東京謡」を聴く機会を得た。その中で杉山半次郎は、ついに観世元義に入門し、岐阜への 1 週間の来訪を依頼した。これが岐阜観世会の発端で、大垣と笠松に稽古日を 2 日ずつ譲り、家元の謡は岐阜地方全域に広まっていった。大正 9 年に観世元義が没した後は、宗家から武田宗治郎が派遣されるようになった。それゆえ、30 周年記念会には、「宗家観世左近先生を初め、観世元義に因縁深き片山、杉浦両先生、亦、元義先生のあとを受け、当会の為に骨身をおしまず御尽し下さいました武田宗治郎先生、御賢息太加志先生等をお迎え」したのである。

まず、主催者の「岐阜観世会」については、同資料に「最近には、岐阜能楽会と連合して、事実上の経営者となり」と記され、「岐阜能

楽会」と何らかの関連があることが窺われる。

この点については、昭和 10 年すなわち前掲の会と同年の 11 月 16 日、岐阜市公会堂にて催された「岐阜能楽会 第一回例会」の番組が手がかりとなる。この会は、冒頭に観世鍊之丞の《翁》があり、千歳には観世織雄、三番叟茂山千五郎、面箱田中保清、大鼓吉田秀夫、小鼓田鍋惣太郎・山田耕石・守屋壽石、笛藤田豊二郎という豪華出演者だった。他に能 2 番、狂言 2 番、独吟 1 番が上演されている。

番組記載のあいさつ文によれば、「岐阜能楽会例会」は年会費 3 円の会員制で、年 2 回開催される決まりであった。実は、岐阜能楽会じたいは昭和 4 年に発足しており、4 月 18 日に行われた記念能楽会の番組に「公会堂に組立の能舞台を名古屋伊藤平二氏の格別なる御盡力に依り悉なく建設致しました」と記されるように、岐阜市公会堂を活動の中心としていた。昭和 10 年の例会発足にあたっては、「事業を分離する事に致しました」と記されており、素人の稽古組織が「岐阜観世会」、観賞会が「岐阜能楽会例会」という形に整理されたとみられる。

次に、岐阜観世会の発足を機に、岐阜における観世流の謡は、京都風から家元風に転換したとの内容について見てみたい。この点については、関の愛好家・岡崎廣次郎がキーパーソンとして挙げられているが、この人物は大正 11 年 8 月 20 日、関町の梅龍寺にて謡会「故岡崎廣次郎先生追善会」(玉声会主催)が催されていることから、これ以前に鬼籍に入ったことが知られる。注目すべきは、このときの出演者の中に、後に観世流能楽師として活躍した関の岡田好司郎がいたことである。岐阜観世会 30 周年と同年、昭和 10 年の 12 月 8 日、岐阜市公会堂にて開催された「岡田好司郎師範職披露能」番組のあいさつ文によれば、岡田好司郎は、橋岡久太郎や武田宗治郎、田鍋惣太郎に師事していた。これより遡ること 7 年前の、昭和 3 年 2 月 5 日と同年 11 月 25 日に、岐阜市神田町の鶴飼ホテルで催された素謡会の番組には、主催者名として「岡田社中 淡交会」と記されている。淡交会はもともと大阪の橋岡雅雪の会で、その芸嗣子で東京に出て観世流 23 世宗家清廉の内弟子となった橋岡久太郎と、久太郎の弟子で大阪在住の下田益三が引き継いでいた。昭和 3 年の二つの素謡会にはいずれも、番外としてシテ下田益三、ワキ岡田好司郎の素謡が出ている。

ちなみに、岡崎廣次郎追善会の番外は、シテ観世元滋、ワキ下田益三の《隅田川》であった。つまり、岡崎廣次郎が岐阜に家元を招いた際には、大阪の下田益三が直接的な仲介者となって、橋岡久太郎を通し、24 世宗家元滋(のちに左近)へと取り次がれたのである

う。

随想文「岐阜観世会につきて」の表現を引用すると、岐阜観世会発足以前は、「かへりみれば三十余年以前当地方の謡は幾んど京謡ばかりが流行しておりまして、しかも各自が、めいめいに勝手な会釈をつけて得意になって謡っておる状態」だったという。昭和10年の「三十余年以前」は、明治38年(1905)以前ということになる。大成版謡本刊行等の観世流統一を成し遂げた宗家元滋が、京都の片山家から観世清廉の養嗣子に入ったのは明治41年だから、岐阜観世流の展開は、まさに宗家元滋の活躍と軌を一にしていたといえるだろう。

また、もともとは京都風の謡だったという点では、近隣の大垣も同様であった。江戸時代においても、かつて参勤交代にともない江戸で稽古した土族は「家元風の謡」であったが、町家は「京都風の謡で通称京観世」だった(河合治平「大垣の謡曲 その他」、『大垣ものがたり5』所収。昭和39年3月。大垣市文化財協会)。揖斐川・長良川・木曾川のいわゆる「木曾三川」の西側地域の特徴として興味深い点であり、今後も調べを進めていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 飯塚恵理人, 尾張藩小鼓方梶川家について, 名古屋郷土文化会「郷土文化」, 査読無, 第65巻第1号, 2010年, p.47-54
- ② 飯塚恵理人, 佐藤友彦師所蔵『高安流狂言応答』, 東海能楽研究会年報, 査読無, 第15号, 2011年, p.2-3
- ③ 米田真理, 松平下総守家の東照宮と祭礼能, 桑名市博物館紀要, 査読無, 第9号, 2011年, p.60-67
- ④ 米田真理, 豊橋市安海(やすみ)熊野神社蔵狂言伝書の性格, 名古屋芸能文化, 査読無, 第21号, 2011年, p.53-66
- ⑤ 米田真理, 貴書に学び、稀書と遊ぶ一能楽師下田益三(明治後～昭和初)による書籍収集一, 朝日大学経営論集, 査読有, 第26号, p.35-42
- ⑥ 米田真理, 豊橋市安海(やすみ)熊野神社蔵狂言伝書の性格[二], 査読無, 名古屋芸能文化, 第22号, p.33-43
- ⑦ 飯塚恵理人, 昭和二十年代・三十年代のCBCラジオ劇関係資料について, 椋山女学園大学文化情報学部紀要, 有, 第12巻, 2013年, p.169-178
- ⑧ 飯塚恵理人, 翻刻 佐藤友彦師所蔵 九冊本間狂言『末社 協能 九 下』, 椋山女学園大学研究論集, 査読無, 第44号人文

科学編, 2013年, p.73-95

- ⑨ 米田真理, 昭和十年以前の岐阜における観世流の歩み, 東海能楽研究会年報, 査読無, 第17号, p.11-12

[学会発表] (計4件)

- ① 米田真理, 安海熊野神社所蔵狂言伝書の書誌的調査について, 東海能楽研究会, 2010年8月15日, カリオンビル(豊橋市市民センター)
  - ② 米田真理, 明治三年桑名佛眼院能興行について一京阪能楽師の招来と、旧藩主への思慕一, 芸能史研究会2011年3月例会, 2011年3月9日, 同志社大学今出川キャンパス
  - ③ 米田真理, 桑名の殿様と芸能一能楽と雅楽一, くわな市民大学講座総合学科(招待講演), 2012年10月21日, 桑名市中央公民館
  - ④ 米田真理, 江戸時代の能, 鯖江郷土史懇談会(招待講演), 2012年11月25日, 鯖江市郷土資料館
- [図書] (計1件)
- ① 飯塚恵理人, [翻刻] 豊嶋要之助筆『高安流 間狂言応答』(三), 『古代中世文学論考』第25集, 2011年, p.303-317

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://zeami.ci.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erito1/index.html>

(椋山女学園大学 飯塚研究室)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

米田 真理 (YONEDA MARI)  
朝日大学・経営学部・准教授  
研究者番号: 20398358

##### (2) 研究分担者

飯塚 恵理人 (IIZUKA ERITO)  
椋山女学園大学・文化情報学部・教授  
研究者番号: 00232132